

「ありのままの救い」

小林 宣正

近年流行になった言葉で「ありのまま」という言葉が話題となりました。作られた自分ではなく本来の自分に還るといふ意味だと思ひます。浄土真宗の教えでもよく「ありのままの救い」と言われることもありますが、解釈には気を付けなければいけません。

『正信偈』の中には、「不断煩惱得涅槃」といふお言葉があり、一見するといふかにも、日頃の生活は見直さず、そのままの自分でお念仏だけお称えしていれば良いように受け取りがちです。罪の重い人も軽い人もお念仏によって救われる教えと聞けば、少々悪事をはたらいても阿彌陀様のお力で救われると考える人も出てくるかもしれません。しかしこのような考え方は、『歎異抄』の中でも「本願ばかり」として示され、「往生かなうべからず」と指摘されます。

親鸞聖人の師にあたる法然上人は、「たとえ五逆罪といふ重い罪を犯そうとも、必ず往生は叶うのだと信じてつとも、小さな罪さえも犯すまいと心を尽くしなさい。わずか一遍のお念仏でも往生は叶うのだと信じてつとも、数多くお念仏を称えようと励みなさい」と言われ、いくら本願のお力で救われると言つても自ら進んで悪をするようではいけないと戒められます。

しかしながら、私達は悪はいけないと分かつていながらも、状況によっては何をしでかすか分からない身を生きています。この世を生きていく時には、「かたじけない」といふ思いを懐きながら、お念仏をお称えしていく生活が大切となるのではないのでしょうか。